たにしの出世

楠山正雄

一

むかしあるところに、田を持って、畑を持って、屋敷（やしき）を持って、倉（くら）を持って、なにひとつ足りないというもののない、たいへんお金持ちのお百姓（ひゃくしょう）がありました。それで村いちばんの長者（ちょうじゃ）とよばれて、みんなからうらやましがられていました。

この長者とおなじ村に、これはまた持っているものといっては、ふるいすきとくわとかまがいっちょうずつあるばかりという、たいへん貧乏（びんぼう）なお百姓の夫婦（ふうふ）がありました。長者の田を借（か）りて、お米やひえをつくっ

て、その日その日のかすかなくらしを立てていました。
　夫婦はだんだん年をとって、毎日はたらくのが苦しくなりました。それでもじぶんたちの跡(あと)をついで、代(かわ)りにはたらいてくれる子どもがないので、あいかわらず夏も冬もなしに、水田(すいでん)のなかにつかって、ひるやぶよにくわれながら汗水(あせみず)たらしてはたらいて、それでもひまがあると、水に縁(えん)のある神様だというので、水神(すいじん)さまのお社(やしろ)に、夫婦しておまいりしては、
「神さま、神さま、どうぞ子どもをひとりおさずけくださいまし。子どもでさえあれば、かえるの子でも、つぶの子でもよろしゅうございます」

といって、一生（いっしょう）けんめいいのりました。
するとある日、きゅうにおかみさんは、からだじゅうがむずむずして、赤ちゃんが生みたくなりました。
「そらこそ水神（すいじん）さまのごりやくだぞ。さあ、早く神だなにお燈明（とうみょう）を上げないか」
　こういってさわいでいるうちに、おぎゃあともいわずに赤ちゃんが、それこそころりと、往来（おうらい）さきに、まるい石ころがころげ出すようにして生まれました。
　まったくの話、この子は、石ころのようにちいさく、まるっこいので、つぶ、つぶ、つぶとよばれている、たにしの子であったのです。

「つぶの子でもと申しあげたら、ほんとうに水神さまがたにしの子をくださった」

夫婦（ふうふ）はこういって、でも、水神さまのお申し子（もうしご）だからというので、ちいさなたにしの子をおわんに入れて、水を入れて、そのなかでだいじにそだてました。

五年たっても、十年たっても、つぶの子はやはりつぶの子で、いつまでもちいさくころころしていて、ちっとも大きくはなりませんでした。毎日、毎日、たべるだけたべてあとは一日ねてくらして、ああとも、かあとも、声ひとつ立てません。

お百姓（ひゃくしょう）のおとうさんは、やはりいつまでも貧乏（びんぼう）で、

あいかわらず長者（ちょうじゃ）の田をたがやして、年（ねん）じゅう休みなしに、かせいでいました。

「やれやれ、きょうも腰（こし）がいたいぞ」

と、ある日、おとうさんは背中（せなか）をたたきながら、地主（じぬし）の長者屋敷（やしき）へ納める小作米（こさくまい）の俵（たわら）を、せっせとくらにつけていました。

　するうち、ふとあたまの上で、

「おとうさん、おとうさん、そのお米はわたいが持って行くよ」

と、いう声がしました。

　ふしぎにおもって、おとうさんがあおむいて見ると、

軒(のき)さきの高いたなの上にのせられて、たにしの子が日向(ひなた)ぼっこしていました。

たにしの子が口をきくはずがない、なにかの空耳(そらみみ)だろうとおもって、かまわずしごとをしていますと、また耳のはたで、

「おとうさん、おとうさん。わたいが持ってくってば」

とよぶ声がしました。口をきいたのは、やはりつぶの子だったのです。

「おとうさん、わたいはちいさいから馬をひいて行くことはできないけれど、米俵(こめだわら)の上にわたいをのせてくれれば地主(じぬし)さまのお屋敷(やしき)まで馬をつれてってきてあ

げるよ」

たにしの子がずんずんそういって口をきくと、おとうさんも、おかあさんも、ほんとうにびっくりしてしまいました。でも、この子はなにしろ水神（すいじん）さまのお申（もう）し子（ご）だから、きっとかわったことができるのかもしれないとおもって、そういわれるままに、たにしの子を、三俵（さんびょう）の米俵（こめだわら）と米俵とのあいだに、しっかり落ちないようにのせてやって、

「じゃあ行っておいで」

といって、馬のおしりをたたきました。

「おとうさん、おかあさん、では行ってまいります」

たにしの子は、人間の子とちっともちがわない言葉で、そうはっきりこたえて、

「さあ出かけよう。はい、しい、しい」

と、じょうずに声をかけました。馬はひひんといなないて、ぱっか、ぱっか、あるき出しました。

でも心配なので、おとうさんがうしろからそっとついて行きますと、たにしの子は馬の上から、馬方のするとおりかけ声ひとつで、きように馬を進めて行きました。林の曲り角やせまいやぶのなかにかかると、はいどう、はいどう馬を止めて、ゆっくりあるかせます。あぶない橋の上でも溝川のふちでも、ほい、ほい、い

いながら、ぶじに通りぬけました。そうして、ひろい田んぼ道に出ると、よくすんだ、うつくしい声で、馬子うたをうたい出すので、馬もいい気持ちそうに、シャン、シャン、鈴を鳴らしながら、げんきよくかけ出して行きました。

田のなかで草をとっていたお百姓たちは、馬方のかげも見えないのに、俵をつけた馬だけが、のこのこ、畑道をあるいて行くうしろ姿を、みんなふしぎそうに見送っていました。

二

だれも人のついていない馬が、ひとりであるいてきて、小作（こさく）のお米を三俵（さんびょう）もはこび込んできたというので、長者屋敷（ちょうじゃやしき）の人たちはびっくりしました。するとそれがじつはひとりでなく、ちいさなたにしが、米俵（こめだわら）のあいだにはさまってついてきて、俵のなかから人間のような声で、

「お米を持ってきたからおろしてください」

と、どなっているのがわかると、よけいびっくりしてしまいました。

「だんなさま、たにしが馬を引いてお米を持ってきました」

と、みんながいってさわぐので、主人の長者ものこのこ出てきました。そのあいだに、たにしの子はひとりではきはき、下男（げなん）たちにさしずをして、お米を馬からおろして、倉（くら）に積（つ）みこませました。そうしてすすめられると、ずんずんお屋敷（やしき）のまんなかに通って、――といいたいところですがじつはころころころがって行って、ごちそうのおぜんのまえにすわりました。

「どうも、今日はおもてなし、ありがとうございます」

こういって、ちいさなたにしが、りっぱに、ごあい

さつの口上（こうじょう）をのべたので、長者（ちょうじゃ）屋敷の人たちも、ほんとうにびっくりしてしまいました。

「いくら水神（すいじん）さまのお申（もう）し子（ご）でも、こんなりこうな口をきくたにしはめずらしい」

　こうおもって、長者はこのたにしを、いつまでもうちの宝物（たからもの）にしておきたくなりました。そこで、たにしのごきげんをとるつもりで、

「たにしどの、たにしどの、お前さんをうちのむすめのむこにとりたいが、どうだね」

といいました。すると、たにしはまじめな声で、

「それはどうもありがとうございます。ではうちへ

帰って、おとうさんとおかあさんに話してみましょう」

といって、さもうれしそうに帰って行きました。

たにしは帰るとさっそく、両親の百姓夫婦にこの話をしました。お百姓はおどろいて、長者の所へほんとうかどうか、たずねにきました。長者もいまさら、それはじょうだんだともいえないので、

「ああ、ほんとうだとも。では、ふたりのむすめをよんで、どちらがむすこさんのおよめになるかきいてみよう」

といって、まず姉のむすめをよび出しました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」

こういうと、姉のむすめは半分もきかずに、

「まぁ田のなかのきたない虫っけらなんか」

と、おこった声でいって、畳をけ立てて出て行きました。

そこで、こんどは、妹のむすめをよび出しました。

「かわいいたにしどのを、お前はむこにとりたいか」

こういうと、妹のむすめは、

「おとうさんのお約束なさったことなら、そのとおりにいたしましょう」

と、すなおにこたえたので、とうとう、たにしの子は長者のむこになることになりました。

三

長者のむすめは、たにしのおむこさんをだいじにして、その上、たにしのおとうさんやおかあさんにもしんせつにしてやりました。でもこのおむこさんはあまりちいさいので、一緒（いっしょ）に里のおとうさんおかあさんの家へ行くときにはおよめさんはおむこさんをじぶんの帯（おび）のあいだに、ちょこなんとはさんで、仲（なか）よく話しながら行きました。でも往来（おうらい）の人には、帯の上におむこ

さんのいることがわからず、およめさんがぶつぶつひとりごとをいってあるいているように見えるので、みんなふりかえって、ふしぎそうな顔をしました。

ある日、お天気がいいので、いつものように、帯のあいだにおむこさんをはさんで、およめさんは、お里の両親をたずねに行きました。

水神（すいじん）のお社（やしろ）の前までくると、たにしのおむこさんは、

「どうも帯のあいだにのせられてばっかりいるのも、きゅうくつになった。すこしおりて休んでいこう」

と、およめさんにいいました。

「ではこの上がきれいで、ひろくっていいでしょう」

と、およめさんはいって、石の鳥居の上に、おむこさんを休ませました。

「ああ、ひろい田んぼが見えて、青青した空がながめられて、ひさしぶりでいい心持ちだ。わたしはここでしばらく日向ぼっこをしているから、そのあいだにお前はお社へおまいりしてくるといいよ」

「それでは、いそいで行ってまいります」

およめさんは、それから石段をのぼって、お社におさい銭をあげて、ていねいに神さまにおじぎをして、またいそいで、石段をおりて帰って行きました。

ところで、もとの石の鳥居の所までできてみると、そ

こにちゃんとのっていたはずの、たにしのおむこさんの姿（すがた）が見えません。鳥居の台石（だいいし）からころげ落ちたのかとおもって、そこらをきょろきょろ見まわしましたが、それらしいもののかげもかたちも見えません。
　もしやからすが、ついくちばしのさきでつばんで、持って行ったのではないか、どうかしてそこらの田のなかへでも、ころがって行ったのであればいいがとおもって、およめさんは田んぼのなかにはいってみました。春さきのことで田のなかは、水がじくじくわき出していて、田の草のなかから、すみれやげんげの花が、顔を出していました。

およめさんはよそ行きのきれいな着物が、どろでよごれるのもわすれて、水田（すいでん）のなかへはいって行きました。そうして、

「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。
つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行（い）た、
お彼岸（ひがん）まいりにさそわれて、
からすのくちにつつかれな、
犬の足にふまれるな」

といいながら、田から田へとさがしてまわりました。
どこへ行ってもたにしは数（かず）しれずうじゃうじゃころがっていますが、それがあんまりおおすぎて、どれが

おむこさんのたにしなのか、かいもく、わけがわからなくなってしまいました。

　およめさんは、それでもあきらめきれないので、あいかわらず、

「つぶ、つぶ、お里へまいらぬか。
　つぶ、つぶ、むこどの、どこへ行った」

といいいい、さがしてまわるうちに、春の日はいつか暮れて、もう田んぼのなかはよく見えないのに、からだはどろまみれになってしまいました。すっかりくたびれて、がっかりしきって、泣き顔になって、およめさんは、深い深いどろ田のなかに、いまにもずるずる

引きこまれそうになったとき、

「これ、これ、こんな所(ところ)で、いつまでもなにをしているのだね」

といいながら、いつどこからあらわれたか、光るようなうつくしいわかものが、涙(なみだ)でかすんでいるおよめさんの目の前に、にっこりわらって立っていました。

　水神(すいじん)さまの申(もう)し子(ご)でありながら、わけがあって、十年ものながいあいだ、たにしのからのなかに封(ふう)じ込められていたのが、きょう、およめさんが水神(すいじん)さまのお社(やしろ)に参詣(さんけい)して、まごころをこめておいのりしてくれたおかげで、封(ふう)じがとけて、このとおりりっぱなわか

ものの姿（すがた）に、かわることができたのです。

あたりまえの人間同士のおむこさんとおよめさんになったふたりは、あらためて水神さまのお社に、お礼（れい）まいりをして、めでたくうちへ帰りました。

こうして、ちいさなたにしから出世（しゅっせ）したおむこさんは、たにしの長者（ちょうじゃ）とよばれて、やさしいおよめさんと一緒（いっしょ）に、末（すえ）ながく栄（さか）えましたと、さ。

底本：「むかし　むかし　あるところに」童話屋
１９９６（平成８）年６月24日初版発行
１９９６（平成８）年７月10日第２刷発行
底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社
１９４８（昭和23）～１９４９（昭和24）年発行
入力：鈴木厚司
校正：林　幸雄
ファイル作成：野口英司
２００１年12月19日公開
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。